

近代英語における関係詞節の意味と機能*

田 中 彰 一・村 上 晋

On the Meaning and Function of Relative Clauses in Late Modern English

Shoichi TANAKA and Susumu MURAKAMI

In this paper we discuss, as our first approach, some of the functional aspects of relative clauses in late modern English. Reviewing Jespersen's research on the actual usage of the writers in the 19th century, we consider how writers make decisions in choosing relative clause constructions. The interaction between the grammatical roles of relatives and their antecedents is examined in terms of several aspects of communicative function, including presupposition, grounding, assertion, and definiteness. We show that writers choose a construction which is expected to convey their ideas to the readers most effectively.

1. はじめに

言語は核となる部分である普遍的なものを持ちながらも、長い時代の流れのなかで変化する部分も持っている。英語も時代とともにその姿を少しずつ変えてきている。発展的には、古英語・中英語・近代英語、そして現代英語の順序になるが、本稿では近代英語の統語的構文に目を向ける。いろいろな構文が歴史的発達を示す中で、特に近代英語における関係詞節構文の意味と機能の実態に光を当てるのが目的である。ただし、近代英語の全体を網羅的に見るには数量的・時間的制約があるため、ここで注目するのは後期近代英語の19世紀の関係詞節構文である。

まず、第2節で近代英語を概観する。第5節の実験研究で見る19世紀の英語に関して簡単に時代背景を確認する。次に第3節で関係詞の発達について見る。関係詞の起源を考察し、who, which, that の主要関係詞の発達を後づける。さらに、それらの複合関係詞的用法にもふれる。次に、Jespersen (1927) のゼロ関係詞の分析を検討する。第4節では、現代英語に関して、言語学 (linguistics)

tics) でわかってきた関係詞の機能をまとめる。伝達機能上の概念を見た後で、関係詞節を含む文の意味解釈の手順を考えてみる。第5節は実験研究である。Jespersen がおこなった19世紀の関係詞のデータを紹介し、分析する。より詳しいデータを得るために、さらに追加調査をして関係詞節の機能的側面を考察する。

本稿の目的は、機能文法の視点から、近代英語における関係詞節の意味と伝達機能を探ることである。統語的意味的分析を土台に、その用法を検証する。英語のデータベースの解析が進んでいないこともあって、本稿を近代英語における関係詞節の実態を見るための基礎的接近的研究と位置づける。

2. 近代英語について

2.1. 19世紀以前

近代英語時代は、ふつう16世紀から19世紀までの範囲を指すとしてよいと思われるが、この期間は現在見るような国際的な共通語としての英語が形成される時期と見てよいであろう。

まず、ルネッサンスとともに、外国との交流が盛んにおこなわれ、あらゆる分野で活発な活動があった。それを背景に、英語は、前時代につづいて、外来の語彙を大量に吸収していった。しかし、一方で、宗教改革の運動によって、英語を宗教の場でも用いる動きや、ラテン語などの古典語に対抗して英語の卓越性・柔軟性を認める自国語意識が出てきた。中英語後期に始まった大母音推移 (Great Vowel Shift) を経て、「正しい」発音と綴りの一致を模索する動きが書記法の問題意識を喚起した。

また、印刷技術の発達、まったく同じテキストを大量に再生することを可能にしたので、英語の伝播に役立ち、安定化の方向へ向かわせた。1611年には、英語の散文のモデルとなっていく『欽定訳聖書』 (*Authorized Version of the Bible* または *King James Bible*) が完成している。Shakespeare (1564-1616) や Milton (1608-74) 等の偉大な作家の存在も忘れることはできない。しかし、英語の用法は動揺したままであり、形態的にも文法的にも依然としてかなりの不安定さをもっていた。

19世紀に入るまでに、文人・学者を中心にして規範的な英語を求める動きが高まり、英文法書や近代的辞書の編纂がおこなわれた。Nathan Bailey 等の辞書もあるが、1755年に出版された Samuel Johnson (1709-84) の *A Dictionary of the English Language* は約4万の語数、語源、慣用上の注意など十分の出来で、標準的な綴り字を提供した点で大きな意味をもっている。特に、James Murray を編集主幹として1884年から刊行された *The New English Dictionary* (現在の *OED*) につながる英語辞書編纂の流れの大きな原動力になっている。辞書編纂と同時に、英文法の慣習上の規定も進められ、教育の普及とともに学校文法 (school grammar) として整理拡充され、現在に至っている。

2.2. 後期近代英語

19世紀は、産業革命 (1760-1830) によりイギリ

スに巨万の富がもたらされた。近代工業化が進む中、英語は政治、経済、貿易、科学等の分野で国際的な共通語としての資格を獲得していった。英国の植民地とされたカナダ、香港、オーストラリア、インド、ケニア、南アフリカ等では、独自の英語の発達を見た。特に、1776年に独立宣言を出したアメリカでは、英語の方言としてではなく独立した言語としての意識が高く、独特の性質を帯びていくことになる。20世紀に入って、アメリカの国力が増し、世界の政治・経済の中心的役割を果たすようになると、アメリカ英語が逆にイギリス英語に影響を与えるようになっていく。

英国の繁栄はビクトリア朝 (1837-1901) の時代と重なる。中産階級の繁栄は、構造的に労働者階級が存在を前提とするものであったが、労働組合の結成と労働党の誕生など、政治的にも労働者の台頭が始まる。国の繁栄とともに、1880年に初等教育が義務化され、1891年には無料化された。こうした教育の充実を背景に、新聞・雑誌・書籍等の文字情報の読者層が拡大され、標準英語がさらに浸透していった。

3. 関係詞の発達

3.1. 近代英語以前

古英語の関係詞節は指示代名詞である *sē* (男性), *sēo* (女性), *þæt* (中性) か、関係不変化詞¹で語形変化しない *þe*, またはそれらの組み合わせによって導入された。この時期 *hwā* (who), *hwām* (whom), *hwæs* (whose) は疑問の代名詞の用法しかなかった。古英語の関係詞は普通 *þe* であった² が、中英語の時代に消失した。また、他のタイプの関係詞も中英語の前半に消失している。

中英語の関係詞は *þat* で、古英語の中性指示代名詞 *þæt* から発達した形である。この *þat* は後の *that* に他ならない。この後14世紀になって、もともと疑問代名詞の *which* が関係詞として採用されるが、しばしば *the which* の形式をとった。この後疑問代名詞であった *whose/whom* を関係詞として使うことが始まっており、*who* はその後16世紀ごろようやく関係詞として一般に使われ始め

た。こうしたより新しい、wh-で始まる関係詞は後に that を伴うことが少なくなかった。つまり、which that, whose that, whom that という形式で用いられることが多かった。これは、wh-関係詞がこの時代にはまだ関係詞として定着していなかったからではないかという予測ができる。したがって、現在使われている関係代名詞では、that が起源的に古くから使われ、which/whose/whom は新しく、who はより新しいものであるということになる。

3.2. 近代英語

近代英語ではこうした流れが場合ごとに整理されていった時代と見ることができる。後期になるまでは、関係詞と先行詞の性の一致関係や that を制限用法に限るという傾向は現代英語ほど強くない。先行詞が人の場合は who を用い、動物や物には which を用いるというような現代英語の文法はこの時代に確立していったと考えられる。現代英語はそれを受けている。

中英語の the which の形式は、Shakespeare に 19 例あり、うち 14 例では前置詞を伴って使われている。³ たとえば、(1)。

- (1) that is one of the points in the which
women still give the lie to their con-
science. (*As You Like It* III. ii. 409)

しかし、この形は 19 世紀までに消失した。

上で述べたように、近代英語初期には依然として which と who の性による使い分けは整理されていないので、しばしば現代英語で who を期待するところに which が現れた。たとえば、1611 年出版の『欽定訳聖書』の有名な主の祈りの冒頭にある。

- (2) After this manner therefore pray ye: Our
Father which art in heaven, Hallowed be
thy name. (*Matt.* 6. 9)

Shakespeare の中にも例がある。⁴

- (3) he which hath your Noble Father slaine
(*Hamlet* IV. vii. 4)

こうした現代英語から見れば破格の呼応も徐々に

現在のような語法に整理されていったと考えられる。第 5 節で 19 世紀の関係詞の用法を具体的に検討する。

すでに見たように、who は 16 世紀頃によりやく使われ始めたが、圧倒的に非制限節で用いられた。17 世紀に入って、制限的にも用いられるようになった。That は中英語、初期近代英語において普通の関係詞であったが、wh-関係詞が使われるようになってからはその使用の比率は少なくなっていた。また、that は現代英語では原則として制限節にしか用いられない。近代英語でも制限節に用いられるのが圧倒的に多いが、非制限にも用いられることがあった。これも非制限的に使われる wh-関係詞に駆逐されていったためと考えられる。⁵

3.3. 先行詞が表面上ない関係詞の発達

現代英語における what は先行詞を含む関係詞で、that which の意であるというふうに説明されるが、近代英語では all what のように all を先行詞とした単なる関係詞のような用法があった。⁶ 大塚 (1976: 65) によれば、このような場合の先行詞が不定のものを指すときに、その先行詞の省略が起り、表面的には関係詞だけが使用されて現在の用法が発達した。一般化されたのは後期になってからである。Shakespeare の時代にも all what の用法があった。

- (4) To have his pomp and all what state
compounds But only painted,
(*Timon of Athens* IV. ii. 35.)

したがって、all that の意味の what は語源的にも総称的 (generic) なものである。

Jespersen (1927: 61) によれば、この総称的な意味をもつ先行詞なしの用法は what に限らず who, whom, that にも見られる。現在でもその例は諺や名句の類に見られるが、現代英語では古風または文語的である。たとえば、

- (5) Who steals my purse steals trash.⁷
(*Othello* III. iii. 157.)

- (6) Whom the gods love die young.

また, Jespersen (1927: 62) は, 近代英語では典型的に 2 つの構文で先行詞なしの関係詞が現れ, 総称の意味が表現されると指摘している。ひとつは, 副詞 ever を関係詞節内に補う構文である。Ever はしばしば関係詞と分かち書きされず複合関係詞の形式をとった。これは明らかに現代英語の whatever, whoever, whomever 等の用法と同じである。これは起源的には中英語初期から例があるが, 古形である whoso は古英語まで遡る。

もうひとつの構文は, 関係詞節内に動詞 choose, please, like, would 等が使われる場合である。たとえば,

(7) Tom may marry whom he chooses.⁸

(8) We cannot know whom we would.

のようなものである。Shakespeare には次の例がある。

(9) Who chooseth me must give and hazard
all he hath (*The Merchant of Venice* II.
vii. 9.)

(10) I may neither choose whom I would, nor
refuse whom I dislike (*The Merchant of
Venice* I. ii. 25.)

That のこの用法に関して Jespersen (1927: 69) は次の諺の例を引いている。

(11) Handsome is that handsome does.

OED には Shakespeare の例が引かれている。

(12) I earne that I eate: get that I weare. (*As
You Like It* III. ii. 77.)

しかし, Jespersen (1927: 67) は which のこの用法は非常にまれであるとし, その理由は which-ever が whoever, whatever より少ないのと同じであるとしている。語尾の -ever は不定のものを指す一般的指示を表すのに, which は特定のものを含意するので矛盾が生じるというのである。大塚 (1976: 66) も, Shakespeare のこの用例は珍しいものと認めて, 次の 1 例を紹介している。

(13) More than mistress of Which comes to
me in name of fault, I must not At all
acknowledge (過失をしでかしたというなら
まだしも, それ以上悪いことをしたとは

思わない) (*The Winter's Tale* III. ii. 61.)
いずれにしろ, which のこの用法はまれである。

3.4. ゼロ関係詞の発達 (関係詞がない構文)

次の例のように, 関係詞があると考えられる位置に音形的関係詞がない場合を Jespersen (1927: 132ff.) は接触節 (contact clause) と呼んで詳しく考察している。

(14) a. He has found the key you lost yesterday.

b. This is the boy we spoke of.

現代英語なら, 学校文法では慣例的にこれらのゼロ関係詞は省略されたものであるとし, それで大きな問題はないと考えられるが, Jespersen はこの説明に満足しない。その根拠として, まずこの構文の起源が古英語まで遡るということがある。すでに見たように, 現在使われている関係詞は中英語の時代に導入されたものであるから, その省略とするのはおかしいからである。もうひとつの根拠は, この構文では, 関係詞節に可能な音声的休止を先行詞の後に置くことができないことである。今日, この構文は頻繁に使われるが, 使われ出したのは中英語以降と言われている。ただし, 中英語のテキストには用例が少なく, 近代になって多くの作家に使われるようになった。中英語に少ない理由として, Jespersen (1927: 135) は, この構文が口語体に特徴的な構文であるため, 当時のテキストの文体となじまないからであるとしている。また, 中英語の時代のテキストは関係詞が顕現する言語からの翻訳が多く, 印刷技術がないため書くのに労力が必要で, そのためこの構文のスタイルとは合わないゆっくりした文体となったと考えられるとしている。

発生的には, ギリシャ語文法の共有構文 (apokoinou) に説明を求める考え方がある。これは, 同じ要素が 2 度現れるのではなくて, 先行節の要素としての役割と, 後続節の要素としての役割をひとつの要素ですませってしまうというものである。これは確かにいくつかの例, たとえば (14), を説明するが, 次のような例では同じ要素を接点にして

先行節と後続節が接触していないので、説明に無理が出てしまう。

(15) Some men there are love not a gaping pig; (*The Merchant of Venice* IV. i. 47.)⁹
 そこで, Jespersen (1927: 134) は次のように述べて, 2文を結合しても代名詞を使って述べる必要のなかった時代の古い習慣のなごりであるとするのが妥当であるとしている。

(16) It is, therefore, perhaps safer to say that this phenomenon is an after-effect of old speech-habits from the time when pronouns were not required to the same extent as in later times: *wæs (was)* or the original form from which it sprung meant very often what we now must express by saying “he (or she, or it) was”, exactly as Latin *erat*, etc. Two sentences which were at first independent units, were pronounced rapidly after each other and thereby came to be felt as a grammatical unit, i.e. one sentence, and this way of connecting thoughts continued in use after it had become customary in most sentences to have a pronoun as the subject (if no other subject was found), and when, therefore, such subjectless groups could be felt as dependent “clauses”.

このようなゼロ関係詞については, 第5節で「情報の流れ」という視点から再検討したい。

4. 関係詞の機能的特徴

現代言語学における関係詞節の分析には, 統語的分析として McCawley (1981) 等があるが, 伝達機能の視点からの研究は関係詞の機能を考える上で示唆的な点が多い。この研究は, 談話研究から始まったもので, 久野 (1978) を初めとして, 福地 (1985), また Chafe, Givón, Halliday 等の一連の研究をあげることができる。このアプローチでは, 言語の機能を考慮し, 情報の流れ, 話し

手と聞き手の情報の新旧, 主題, 前提と断定, 焦点, 談話上の原則などを分析の概念として用いる。

4.1. 関係詞節の機能

まず, 上で述べた機能的概念を基にした分析で現代英語の関係詞についてわかっていることの大枠を見ておきたい。

制限的な関係詞節は名詞句の中に埋め込まれている (embedded) 構造になる。¹⁰ 機能的にも, 関係詞節の内容は従属的 (subordinate) で, 意味的語用論的に前提となると言われている。たとえば,

(17) The girl who John spoke of hit Mary.
 を考えてみると, 話し手は, 聞き手が知っていると仮定した内容を関係詞節で表している。関係詞節は, いわゆる形容詞節で先行詞である the girl を修飾しているわけであるから, the girl がどういう人物であるかを知るのに役立つ (と思って話し手は発話している)。これは, 形容詞の限定用法と同じである。つまり, 関係詞節の内容は, 話し手の判断で, 聞き手が the girl の指す人物を同定 (identify) しやすいうように提供された情報である。したがって, (17)の主断定は主節の(18)であり, (19)は the girl について前提的な内容ということになる。

(18) The girl hit Mary.

(19) John spoke of the girl.

そのため, 次の対話で, 不信を意味する How do you know? の発話を a) に解釈するのは自然であるが, b) を意味するとするのは無理がある。前提であるはずの知識について問いたずのは変であるからだと考えられる。¹¹

(20) A: The girl who John spoke of hit Mary.

B: How do you know?

a) How do you know the girl hit Mary?

b) How do you know John spoke of the girl?

しかしながら, 先行詞が定冠詞でなく, 不定冠詞付きの不定のものを指す場合は, 関係詞節の内容は上で見たような前提になっていない。たとえば,

- (21) There's a woman in my class who's a dentist.

では、who 節の内容は前提となっているというより、「私のクラスには一人の女性がいて、その女性は歯科医なんだ。」という意味あいでは伝達上主張の一部になっていると判断できる。つまり、関係詞節の内容は先行詞の同定を助けるというより断定される新情報になっている。しかも、(21)では who 節が外置¹²の操作によって文末に移動されているので重要な情報として伝達の中心になっている。

それでも、Givón (1993: 112-3) の言うように、次のような例では関係詞節はある程度前提的であろう。

- (22) A woman you met last year just called.

先行詞を不定冠詞付きで述べているので、話し手は a woman が聞き手にとってまったく新しい情報であるかのように導入しているが、それでもその女性は後方照応的 (cataphoric) に限定されている。この例の関係詞節 you met last year は聞き手の過去の経験を表し、それを先行詞である a woman に関係づける役割をはたしている。その関係づけで話し手は a woman がどういう人物であるか聞き手に背景的知識を与えている。しかし、話し手はそれが特定の情報ではないので、聞き手にとって a woman を同定できるほど十分な内容をもっていないと判断している。そのため、a woman は不定冠詞で導入されているのである。より詳しい考察が必要であるが、(21)のような例を除けば、制限的關係詞節は先行詞の背景的情報を導入すると言えるであろう。

制限的關係詞節に対して、非制限的關係詞節は前の部分に対して継続的に情報を与える構文である。そのため、非制限的關係詞節の内容は、前提とならず、新情報として断定される。たとえば、

(23) John gave the ring to Mary, who was reluctant to receive it.

では、who 節は主節とは独立した情報単位として断定されていて、and she was reluctant to receive it と書き換え可能であり、継続的に使われているのである。しかし、単独で断定となる独

立文になっていないのであるから、who 節は断定されていても付加的挿入的な情報を与えている。¹³

Which の非制限的用法には、主節の文の内容を受ける場合がある。

- (24) Mary broke off her engagement, which surprised her mother.

Which が指す内容は先行する主節が表しているできごとであるから、主節全体の内容を受けてことになる。また、この文内容を受ける関係詞に近い用法が as にもある。

- (25) Picasso is a great painter, as we all know.

しかし、as には接続詞的な側面があり、「～するように」という積極的な意味合いがあるので、次のような場合は which だけが可能である。

- (26) John is ill, which/ *as we don't know.

この as の用法を完全に関係詞とするのは問題がある¹⁴が、本稿では一応関係詞として扱う。¹⁵

非制限的用法と制限的用法の違いは重要で、しばしば意味の違いを引き起こす。限定する対象が変わるからである。たとえば、

- (27) a. We study ants which live in the tropics.
b. We study ants, which live in the tropics.

で、(a)では研究の対象は「熱帯地方のアリ」で限定されたアリであるが、(b)では「アリ」が研究対象で、すべてのアリについて熱帯地方に生息すると言っていることになり、現実と合わなくなる。

関係詞の伝達上の機能をまとめると、制限的用法では、話し手は関係詞節の内容が聞き手になじみがある (familiar) 背景的なことであると仮定して発話している。ある程度前提となっている内容で先行詞である人やものを修飾して、それとわかるようにするわけである。したがって、関係詞の内容は旧情報である。非制限的用法の関係詞節の内容は、and などと言い換えられることからわかるように、新情報として聞き手 (読み手) に断定的に示される。また、その内容は主節の内容にとつ

て付加的なことを聞き手に想起させたり思い出させる機能も持っている。

4.2. 関係詞節を含む文の解析

制限的な関係詞節の構造は埋め込みであるから、補文や他の従属節の場合と同じように、関係詞を含む文は意味解釈をするのに複雑な構造になる可能性がある。しかし、その際、話し手（書き手）が無作為に関係詞節を導入するとは当然考えられない。むしろ、聞き手（読み手）がわかりやすいように、効果的な情報配列によって積極的に関係詞節構文の工夫をするはずである。そこで、知覚的な面で聞き手はどう関係詞の構文を理解するのか、つまり、関係詞節を含む文の解析はどうなるかを簡単に見ておくことにしよう。

たとえば、(28)を実際に解析すると、

(28) He who would climb the ladder must begin at the bottom.

明示的な関係代名詞 who の助けで、He who would climb the ladder の部分まで来ても、名詞句としかならないのでさらに述部がくることが予測できる。実際その後に動詞があるので、その前までは主語の名詞句であることがわかる。しかも、この途中で曖昧性はない。しかし、who を省略すると、どうだろうか。

(29) *He would climb the ladder must begin at the bottom.

この主格の関係詞の省略は普通不適格¹⁶であるが、次の(30)のように、there 構文や提示文で主格関係詞のない接触節は可能であるので、主語に当たるから(29)は不適格とするわけにはいかない。

- (30) a. There is a boy below wants to speak to you.
b. It is a boy sits there.
c. Who is this man wears my tie?

(29)の文は、文解析にとって問題となる。なぜなら、文頭から解釈して進む場合、主語が He、述語が would climb... と解釈すれば、次に述部があるため、意図された意味をとるために文の解析をやり直さないといけないからである。このような

曖昧性は解釈上負担であって、上で述べたように、実際使われない。しかしながら、主語の位置のゼロ関係詞がないということではない。たとえば、

(31) All we know is not so much.

は実際に生起可能なゼロ関係詞の構造である。この場合は、接触節になっているにもかかわらず、(29)のように、解釈の負担になるような曖昧性はない。つまり、主語の位置のゼロ関係詞は、関係詞が目的語の役割をもつほうが、主語の役割をもつものより曖昧性がなく処理しやすいということになる。実際、負担が大きすぎるために後者は不適格になると思われる。

以上簡単に聞き手（読み手）の解釈の手順を見てきたが、話し手の配慮はこうした基本的な情報の配列にのみ向けられるのではないであろう。意識的でないかもしれないが、談話中の情報の流れに沿って、より効果的な表現の工夫があるはずであり、その手段のひとつとして関係詞節が使われるということも推測できる。ゼロ関係詞の伝達機能については、さらに次節で実例に基づいて詳しく考察することにしたい。

5. 実際研究

5.1. Jespersen の調査

Jespersen (1927: 84) は19世紀の関係詞の実際の使用をみるために、(32)の表¹⁷にまとめられる調査を試みている。

(32)

	Restrictive	Nonrestrictive	who (whom)	whose, person	whose, thing	which	that, person	that, thing	no pronoun, person	no pronoun, thing	what	-ever (whoever, etc.)	where (wherein, etc)	as
Shelley	75	25	31	5	3	32	0	10	2	4	7	0	4	2
Tennyson	77	23	18	4	0	7	9	39	3	7	6	0	7	0
Carlyle	52	48	21	3	0	40	6	8	1	4	11	0	5	1
Macaulay	88	12	31	3	0	51	0	1	0	0	7	1	2	4
Huxley	89	11	26	9	0	42	0	2	1	6	12	1	0	1
Stevenson	74	26	24	0	0	10	7	20	4	15	7	0	11	2
Hope	92	8	18	0	0	26	1	4	4	13	26	1	4	3
Sweet	90	10	13	0	0	4	2	16	5	35	10	1	13	1

調査は、表左の作家の1作品から100例の関係詞を抜き出し、分類してなされた。それぞれの作家の作品は以下の通りである。

(33) a. Shelley: *Prometheus Unbound*, (冒

頭から100例)

- b. Tennyson: *Maud*, (冒頭から100例)
- c. Carlyle: *The French Revolution II*, (Book V. 5章以降から100例)
- d. Macaulay: *Essay on Addison*, (冒頭から100例)
- e. Huxley: *Essay on Liberal Education* (p. 58以降から100例)
- f. Stevenson: *Treasure Island*, (4章以降から100例)
- g. Hope: *Dolly Dialogues*, (冒頭から100例)
- h. Sweet: *Elementarbuch des gesprochenen Englisch* (Nos. 1-24, 53-73から100例)

(h)の Henry Sweet の著作は他の文学作品との比較のために調査されたもので、文学的英語ではなく口語的 (colloquial) な英語の例として引かれている。Jespersen よると、この表について特徴的なことは、まず、制限的用法の例の数で、Carlyle がもっとも低い。これは、その強い情熱的な色調をもつ文体に特徴的に現れているとしている。次に、Tennyson と Stevenson では which の用例が少ないことから、この2人の作家は日常会話に合わせてその使用を避けているとしている。というのも、口語的な文体をもつ Sweet の which の使用例が同じように少ないからである。Tennyson に that の用例が多い (合計48) のは、好音性 (euphony) のために歯擦音 (sibilant) を嫌うよく知られた彼の傾向のためではないかとしている。実際 that の使用箇所を which で置き換えると音的な調和がくずれる例を紹介している。Jespersen は、最後に Macaulay の that とゼロ関係詞の使用の少なさが目立つことを指摘している。

本来なら(32)の表の後づけ調査をして、データの確認と再検討をするべきであるが、データベースとして新資料となるように本稿では19世紀の別の作家の作品について Jespersen の方法にしたがってデータを収集整理した。その作品とは次の2つである。¹⁸

(34) a. Lewis Carroll: *Alice's Adventures in Wonderland*.

b. Jane Austen: *Pride and Prejudice*.

それぞれの冒頭から関係詞節を100例抽出し、分析した結果がつぎの表である。

(35)

	Restrictive	Nonrestrictive	who (whom)	whose person	whose, thing	which	that person	that thing	no pronoun, person	no pronoun, thing	what	-ever (whoever, etc.)	where (wherein, etc)	as
Austen	64	36	34	2	0	29	0	6	1	3	9	4	8	4
Carroll	70	30	10	1	0	26	2	14	2	30	8	3	2	2

この表で特徴的なのは、Austen の who (whom) の使用数が多いことと、Carroll のゼロ関係詞の使用数32が Sweet の場合と同じくらい多いことである。Austen の who (whom) の使用数については、その作品の主題が主人公の Elizabeth の恋愛と結婚にあるので、人物について書かれている部分が多いためであろう。Carroll のゼロ関係詞の多さは、子供を対象とした作品であるため複雑な構文を使わない日常の口語に近い文体で書かれているからではないかと推測できる。

しかしながら、もちろん本稿の目的はそうした考察で終わることではない。単に作家の文体的な差違や関係詞の使用の頻度を見るだけでなく、関係詞の機能的な意味を見るのが目的である。その点から見れば2つの表は分析としては不十分である。(32)(35)の表は、各関係詞の使用の頻度はわかるが、その関係詞が目的語として使われたのか主語として使われたのかはわからない。さらに、先行詞となる要素が文中で主語となっているのか目的語になっているのかもわからない。また、制限非制限が関係詞により実際どのように使い分けられているのかもわからない。テキストの情報の流れから見れば、むしろそうした使われ方が意味をもつはずである。

5.2. 新視点

書き手 (話し手) は、談話上より効果的な表現の工夫をして読み手 (聞き手) に情報を提供する

はずである。そこで、(35)の表の追加的調査として、先行詞の文法役割と関係詞が関係詞節内で果たす文法役割とを次の表にまとめる調査をおこなった。

(36)

relative main clause	Subject		Object	Prepositional Object	Others
	Intransitive	Transitive			
Subject					
Object					
Prepositional Object					
Predicate Nominal					
Others					
Total					

縦軸が主節における先行詞の文法関係を示し、横軸がそれを受ける関係詞の関係詞節内における役割を示している。言及の便宜のために、以下では、S (subject), O (object), I (intransitive), T (transitive), PO (prepositional object), PN (predicate nominal) と省略することにする。また、縦軸の主節における先行詞の文法関係と横軸の関係詞節内における役割をその順序で並記して、ひとつの関係詞の用法を表すことにする。たとえば、S-O なら、先行詞が主節で主語の役割を、それを受ける関係詞が関係詞節内で目的語の役割をもつ用法をさす。実例は次のようなものである。

(37) S-O: *The first thing* [she heard] was a generous chorus of "There goes Bill!" (LC)

PO-S: her eyes fell upon *a little bottle* [that stood near the looking-glass]. (LC)

PN-S: but it is *a subject* [which always makes a lady energetic]. (JA)

すべての関係詞をひとつの表にすることは可能であるが、説明が煩雑になりすぎるので、主要な関係詞を、who (whose/whom), which, that, zero 関係詞の順にひとつずつ見ることにする。その考察からそれぞれの作品の関係詞表現について、機能的な裏付けが導き出されるはずである。

5.2.1. who/whose/whom

問題の2作品の who/whose/whom の使用法は次の表になる。(これも便宜上であるが、左に Carroll のデータ、右に Austen のデータを配置して、別に扱うことにする。また、表の () 内の数字はその項目の非制限的用法の数字を示す。)

(38)

	S		O	PO	Others
	I	T			
S	6(5)				
O					
PO	2(1)	3(3)			
PN					
Others					
Total	8(6)	3(3)			

	S		O	PO	Others
	I	T			
S	4(2)	1(1)		1	
O	1(1)	1			
PO	9(6)	4(2)		4(1)	
PN	1	6(2)	2	2(1)	
Others					
Total	15(9)	12(5)	2	7(2)	

おもしろいことに、左の Carroll には whom の用例がひとつもない。また、1例だけの whose は S-S であった。¹⁹⁾ したがって、() 内の数字が示すように、Carroll の who は10例中9までが非制限で用いられていることになる。これに対して、すでに(35)で述べたように、Austen の who/whom の用例は相対的に多く、whose は S-S と PO-PO の2例である。Whom は関係詞節内では当然 O と PO の用例しかなく、PO の方が多い結果になっている。また、whom は制限的に用いられる傾向があるようである。他方、who はすべて主語 S となる26例で、自動詞他動詞、制限非制限に関して意味のある差はないと考えられる。現代英語の、who を関係詞節内で目的格として用いる傾向は最近のことなので、その用例がこれら2作品のデータにはひとつもないのは当然かもしれない。

以上の観察から、問題としては、(i) Carroll の用法に who の非制限的用法が傾向として多いのはなぜなのか、また(ii)時代的に前の Austen に whom の使用例があるのに、なぜ Carroll にはひとつも見られないのか、ということが考えられる。もちろんデータの総数からすると、速断は危険であるが、見通しをつけるという意味で方向を探ることはできそうである。

第4節で見たように、書き手(話し手)は、テクストの中でより効果的な表現の工夫をして読み手(聞き手)に情報を提供するはずであるから、

(i)(ii)の問いにも機能的な説明を用意することができる。まず、すでに4.2.節で述べたように、テキストでの情報の流れは読み手にとって理解しやすい順序でなければならない。Carrollの作品は読者に子供を想定して書かれているので、作者は読み手に大人と同じ判断力や記憶力を期待してはいないと推測できる。したがって、作者は解釈上負担の大きい構造を無理をして使う必要はない、場合によっては、避ける必要があるであろう。

4.1.節で見たように、制限的用法の関係詞節は前提を表す。構造上全体として名詞句を形成し、意味解釈上もそうした情報単位を記憶して処理する必要がある。したがって、そのような制限的關係詞節が多用されるということは読者の一時記憶にかなりの負担となると予測することは根拠のあることである。これに対して、非制限的關係詞節は継続的に使われるわけであるから、情報を線形的に足していくだけで処理できるという解釈上の容易さがあると言えるであろう。

この考えが正しいとすると、(i)の問いに対しては、作者が極力複雑な構文を多用しないようにして、読みやすくしているのではないかという予測ができる。実例を見てみよう。

(39) a. 'I'm very sorry you've been annoyed,' said Alice, who was beginning to see its meaning. (LC)

b. At last the Mouse, who seemed to be a person of authority among them, called out, 'Sit down, all of you, and listen to me! (LC)

関係詞節はそれぞれ付加的な情報として、追加・挿入されている。さらに、(a)では said Alice の部分で主語と動詞の倒置があり、構文を簡潔にする工夫があると判断できる。このような倒置は他にも3例(S-S)あった。

この延長線上で(ii)の問いにも説明を与えられるかもしれない。Austenのwhomの使用例を見てみよう。

(40) a. but still they admired her and liked her, and pronounced her to be a sweet

girl, and one whom they should not object to know more of. (JA)

b. and it is better to know as little as possible of the defects of the person with whom you are to pass your life. (JA)

(a)はPN-PO、(b)はPO-POである。どちらの場合にもwhomが関係詞節内でどういう意味内容を形成するのかは文末まで読み進まないとわからない。その点で、解釈上解析に負担のある構造と言えるであろう。しかも、(b)は地の文ではなくて、登場人物のことばとしての表現である。程度の差があるであろうが、こうした表現は子供のことばとしては受け入れがたいのではないであろうか。もしこれが正しいとすると、おそらくwhomを多用して、上の例のように、深く埋め込まれている要素と結び付けられた場合、未熟な読み手にはかなりの負担となるに違いない。一般に行為を記述する場合、動作主(agent)を文頭にもってくる方が、受け手(patient)をもってくるより解釈は容易である。²⁰ 逆に、Austenの想定している読者は、(40)のような複雑な構造を比較的容易に解釈できる成熟した読み手ということになるだろう。

このように、伝達機能上の考察をしてみると、制限非制限の使い分け、who/whose/whomの使い分けはそれぞれの作家において機能的な意味のあることがわかる。もっと言えば、文体を含む作家の表現形式には機能的裏付けがあるということになるだろう。もちろん、それはwho/whose/whomに限られるはずはない。whichを見てみよう。

5.2.2. which

(41)

	S		O	PO	Others
	I	T			
S			1(1)		
O	4(3)	1(1)		2(2)	
PO	5(5)		2(1)	3(2)	1
PN	2(2)			1	
Others	3(3)			1	
Total	14(13)	1(1)	3(2)	7(4)	1

	S		O	PO	Others
	I	T			
S		1		2(1)	
O	3(1)	2(2)			
PO	3(1)	2	2	2(1)	
PN		2	3	2(2)	1
Others	3(3)	1(1)			
Total	9(5)	8(3)	5	6(4)	1

Whichは2作品共に関係詞節内で主語と目的語

の役割を果たしていることがわかる。Carroll の作品は、who の場合と同じく、非制限的用法が多い傾向にある。26例中20までが非制限である。Austen の方は、29例中12である。もちろん、この数字が作品全体の統計をとるのに十分かどうかは統計処理によらないといけませんが、それでも Carroll の数字はかなり多いと言えるであろう。その説明は、who の場合と同じ理由によるものと思われる。PO-S の1例のみあげる。

- (42) and this time it vanished quite slowly, beginning with the end of the tail, and ending with the grin, which remained some time after the rest of it had gone.
(LC)

この考察が正しいとすると、which の場合も、制限非制限の使い分けは機能的な意味のあることがわかる。

興味深いのは、第4節で見た、先行する文の内容を受ける which の用法が、どちらの作品にも使われていることで、この時代になんか一般的に使われていると思われることである。

- (43) You and the girls may go, or you may send them by themselves, which perhaps will be still better, (JA)

ただ、Carroll には文頭に which を置いて先行文脈の出来事の内容を受けさせる例があって、特徴的である。

- (44) a. Which brought them back again to the beginning of the conversation.
(LC)
b. Which would not be an advantage.
(LC)

このような文頭の which の用法は、現代英語では例外的用法として扱われる。

他方、Austen には関係詞を分詞節の中で用いる構文がある。

- (45) Miss Lucas defied her friend to mention such a subject to him, which immediately provoking Elizabeth to do it, she turned to him ... (JA)

このタイプは who にもある。

- (46) she was eagerly succeeded at the instrument by her sister Mary, who having, in consequence of being the only plain one in the family, worked hard for knowledge and accomplishments, was always impatient for display. (JA)

このような例は Carroll には見られない。やはり、構文が複雑になりすぎるためではないかと考えられる。

5.2.3. that

(47)

	S			O	PO	Others
	I	T				
S	1					
O	3					
PO	9(1)			1(1)		
PN	2					
Others						
Total	15(1)			1(1)		

	S			O	PO	Others
	I	T				
S						
O	3					
PO				1		
PN				2		
Others						
Total	3			3		

That の例はそれほど多くはないが、Carroll では関係詞節内で圧倒的に主語、しかも自動詞の主語の役割を果たしていることがわかる。これはいったいなぜであろうか。すでに3.2.節で見たように、現代英語では that は原則として制限的用法にしか用いられない。ということは、5.2.1.節の who の考察で述べたように、前提を表す関係詞節が全体として名詞句を形成し、意味解釈において比較的大きな情報単位を記憶して処理する必要がある。そのような関係詞節が多用されるということは読者にかなりの負担となるわけであるから、無理に使う必要はなく、場合によっては避ける傾向があると思われる。

しかしながら、いろいろな要因で制限的關係詞節を使う必要も出てくる。よく知られているように、that が which/who より好まれる場合がある。先行詞が any-や only で修飾されていたり、it is の後などである。実際の例にもそれがある。

- (48) a. The only things in the kitchen that did not sneeze, were the cook (LC)
b. Alice looked all round her at the

flowers and the blades of grass, but she could not see anything that looked like the right thing to eat or drink under the circumstances. (LC)

- c. and she soon made out that it was only a mouse that had slipped in like herself. (LC)

したがって、that の使用を避けられない場合があるということになる。とすると、制限的關係詞節の使用を避けられないのであるから、作者は読者である子供に負担をそれ以上課さない努力をするのではないだろうか。最も負担の少ない情報の流れは、關係詞が關係詞節内で主題になりやすい主語の役割を果たすことである。²¹ 自動詞は目的語をとらず、他動詞より項が少ないわけであるから、自動詞の主語となる關係詞を用いた關係詞節がもっとも負担が少ない。したがって、Carroll の that の用法では、關係詞節内で圧倒的に自動詞の主語の役割を果たしている關係詞が多いのである。この考え方が正しいならば、who や which の制限的用法においても、自動詞の主語の役割を果たしている用例が多いはずであるが、(33) (41) からわかるように、実際傾向として多いと言えるであろう。

現代英語では that は原則として制限的用法に限られると述べた。近代英語でもその傾向はあったが、初期には非制限的用法と制限的用法が同じように使われた。²² (32) でみた Tennyson にも非制限的用法の that があると Jespersen (1927: 85) は指摘している。おもしろいことに、Carroll の that の用例には 2 つの非制限用法が含まれている。²³

- (49) a. Fury said to a mouse, That he met in the house, (LC)
b. She stretched herself up on tiptoe, and peeped over the edge of the mushroom, and her eyes immediately met those of a large blue caterpillar, that was sitting on the top with its arms folded, (LC)

これらに共通するのは先行詞が動物で、しかも「不

思議の国」の生き物としてことばをしゃべる擬人化された存在であることである。非常に興味深いのは (b) の「that」は有名な手書きの初版本では「which」になっていることである。出版の際の編集者の判断であろうか。

5.2.4. ゼロ関係詞

ゼロ関係詞の場合も、Carroll に偏向が見られる。

(50)

	S		O	PO	Others
	I	T			
S			6		
O			6		
PO			8	1	
PN			8		
Others			1		2
Total			29	1	2

	S		O	PO	Others
	I	T			
S					
O					
PO			3		
PN				1	
Others					
Total			3	1	

Austen のゼロ関係詞は用例の数が少ないので判断できないが、Carroll のゼロ関係詞は 32 で、しかも大半が關係詞節内で目的語となっている。よく知られているように、現代英語ではゼロ関係詞は目的格が最も普通である。したがって、19 世紀にもその傾向があるとみるべきであろう。²⁴ ゼロ関係詞は、すでに 5.1. 節で指摘しているように、口語、特に会話においてよく使われる構文である。そのため、子供にも理解できる物語としての Carroll の作品に多用されていると考えられるのであるが、目的格のゼロ関係詞は伝達機能上も理解しやすい構文であるはずである。実例を見てみよう。

- (51) a. all she could see, when she looked down, was an immense length of neck (LC)
b. I'll try if I know all the things I used to know. (LC)
c. And she began thinking over all the children she knew that were of the same age as herself, to see if she could have been changed for any of them. (LC)

S-O のタイプは 6 例であるが、(a) のように主文の主語(S)を受ける動詞が 6 例とも be 動詞であるの

は、他動詞で受けて構造を複雑にしないための作者の一配慮かもしれない。(b)は O-O のタイプである。(c)は PO-O である。(c)は先行詞の all the children をゼロ関係詞と that で受けるいわゆる二重限定 (double restriction) であるが、例はこの 1 例のみであった。

4.2. 節でみたように、目的格のゼロ関係詞は線形的に文の意味解釈をしていく際、主節でどの文法関係をとっても、曖昧性が少ない文解析となる。²⁵ しかも、上の例のように、ゼロ関係詞節 (she could see, I used to know, she knew) は比較的短く挿入的であるから、関係詞節の修飾する名詞句の意味をまとめる際に大きな負担とはならないようになっている。

5.2.5. 関係詞の意味と用法

これまでの 4 つの関係詞の表をひとつにまとめてみると次のようになる。

(52)

	S			O	PO	Others
	I	T				
S	7(5)			7(1)		
O	7(3)	1(1)		6	2(2)	
PO	16(7)	3(3)		11(1)	4(2)	1
PN	4(2)			8	1	
Others	3(3)			1	1	2
Total	37(20)	4(4)		33(2)	8(4)	3

	S			O	PO	Others
	I	T				
S	4(2)	2(1)			3(1)	
O	7(2)	3(2)				
PO	12(7)	6(2)		6	6(2)	
PN	1	8(2)		7	5(3)	1
Others	3(3)	1(1)				
Total	27(14)	20(8)		13	14(6)	1

全体で100例であるから、この主要関係詞で Carroll では85%、Austen では75%になる。全体的比較をして特徴的な差違は、関係詞節内で関係詞が主格となるとき、関係詞節内に他動詞を使う用例が Carroll と Austen ではかなり差があるということである。この比較だけでは Carroll が少ないとするか、Austen が多いかとするか、を決めることができない。しかし、意識的にしろ無意識的にしろ、関係詞の意味と用法は何らかの点で作者の機能的な配慮に関係しているものと考えられる。4 つの関係詞以外の考察も必要であるが、用例の数などの問題もあるため、次の機会に検討することにしたい。

6. 結語

第1節で述べたように、本稿の目的は、言語理論としての機能文法の視点から、近代英語における関係詞節の意味と伝達機能の実態を探ることであった。単に用例の数の問題でなく、どういう機能をもった関係詞の結びつきが実際に使われているのかを中心に考察を進めた。わずか2つの19世紀の作品ではあるが、作品の性質上かなりの機能的対比を見いだすことができた。言うまでもなく、近代英語の関係詞を考察するには、データベースとしては少なすぎる200例であり、またデータの拡充を前提とした厳密な統計的处理も必要である。さらにそれを基にした、文理解の情報理論など、厳密な理論に沿った機能的分析が必要かもしれない。

しかしながら、ここで見た特徴は現代英語と同じ機能的特徴を示しており、その関係詞節の用法は伝達機能上現代英語とほぼ同じ意味と機能を果たしているとしてよいであろう。そうであれば、近代英語の関係詞節の用法は、当然ながら、現代英語の機能的分析で十分接近可能であると言える。近代英語のコンコーダンスやデータベースが充実し、そうした分析が進めやすくなれば、さまざまな表現の用法と機能が検証されるはずである。本稿の形はその可能性のひとつであり、基礎的接近的研究と位置づける所以である。

註

*本研究の一部は文部省科学研究費 (課題番号 06710290) の援助を受けた。いつもながら、Zonia L. Mitchell 女史には、インフォーマントとして例文に有益なコメントをいただいている。謝意を表したい。

1. Relative particle と呼ばれる。

2. Pyles (1971: 138) 参照。

3. Bartlett (1894) による。

4. 大塚 (1976: 62) では、Shakespeare の作品においても who と which の今日の区別が根本的には存在していたという指摘がなされている。(i)にその指摘を引用する。

(i)私の見るところでは、すでにシェイクスピアにあっては、現今の“who”と“which”の区別は、根本的には存在していたように思われる。上例の

ように、今なら“which”を使うところが“who”になっていた、次例のようにその反対もあるけれども、おおかたは現今の用法と平行しており、それが背馳しているときには、多かれ少なかれ、擬人化または非人称化が、修辭的に行なわれていると解釈できる。

I am married to a wife Which is as dear to me as life itself (僕は結婚したが、その相手は僕の命ほど大切だ) *Merch.* IV. i. 282-3.

No woman had it, but a civil doctor Which did refuse three thousand ducats of me (それをやったのは女なんかではなくて、ただの法律の博士、そいつは僕から五千ダカットを受けようとはしなかったのだ) *Ibid.* V. i. 210-1.

5. Jespersen (1927: 80).
6. Jespersen (1927: 129).
7. 例文は Jespersen (1927: 61) から.
8. 例文は Jespersen (1927: 62) から.
9. 例文は Jespersen (1927: 134) から.
10. McCawley (1981) の分析等を参照.
11. Givón (1993: 111) の議論参照.
12. 外置 (extraposition) については福地 (1985: 105) 等を参照.
13. 詳しくは Givón (1993: 118-9) の議論参照.
14. たとえば, as 節は which 節より自由に生じ, 文頭にくることもできる. また, 関係詞節内に as が受けているはずの文内容を指す it が生じる.
 - (i) John is the best candidate, as it seems.
15. 詳しくは田中 (1994) を参照.
16. ㉑はいわゆる袋小路文 (garden path sentence) に近い構文になる. 袋小路文とは, たとえば, 次のような文である.
 - (i) The horse raced past the barn fell.
(Marcus 1980)
17. 実際の表の本論とかかわらない部分を一部省略して引用している.
18. 有名な作品なので注釈の必要はないと思われる. 便宜上それぞれの作家の出典を JA, LC と略記する.

尚, 使用テキストは以下の通りである.

Lewis Carroll: *Alice's Adventures in Wonderland*. 1865. Harmondsworth: Puffin Books.

Jane Austen: *Pride and Prejudice*. 1919. Harmondsworth: Penguin Books.
19. Whose の場合は修飾している名詞句の文法関係を表にとっている. たとえば, 本文中の S-S は次の例である.
 - (i) William the Conqueror, whose cause was

favoured by the pope, was soon submitted to by the English, (LC)

20. 言語習得上も関係する.
21. Kuno (1976: 420) は次の指摘をしている.
 - (i) The Thematic Constraint on Relative Clauses: A relative clause must be a statement about its head noun.
22. Jespersen (1927: 80) を参照.
23. 抽出した 2 例以外にも非制限の that の例があった.
24. 児玉 (1970) では, 18 世紀の作家 Henry Fielding (1707-54) の作品で先行詞が人の場合, ゼロ関係詞は圧倒的に目的格が多い (目的格 78% 対主格 22%) ことが指摘されている. 19 世紀の作品である調査した 2 作品では物に使うゼロ関係詞の方が多いため, そのまま比較するわけにはいかないが, 目的格にゼロ関係詞が使われる傾向は 18 世紀にすでに強かったのかもしれない.
25. たとえば, 主格のゼロ関係詞は主語の位置で普通はみとめられない. 本文の ㉑の例を参照.

㉑ *He would climb the ladder must begin at the bottom.

cf. There is a boy below wants to speak to you. (30a)

参考文献

- 荒木一雄. 1954. 『関係詞』東京: 研究社.
- Bartlett, J. 1894. *A New and Complete Concordance, or, Verbal Index to Words, Phrases, and Passages in the Dramatic Works of Shakespeare, with a Supplementary Concordance to the Poems*. London: Macmillan.
- Berent, G. P. 1975. "English absolutes in functional perspective." *Papers from the parasession on functionalism of Chicago Linguistic Society*, 10-23.
- Carroll, L. 1985. *Alice's Adventures Under Ground*. Italy: British Library Cataloguing.
- Chafe, W. 1984. "How people use adverbial clauses." *BLS* 10: 437-449.
- Declerck, R. 1983. "A restriction on sentential relative as-clause." *General Linguistics* 23 (4): 265-82.
- Fox, B. A. and S. A. Thompson. 1990. "A dis-

- course explanation of the grammar of relative clauses in English conversation." *Language* 66: 297-316.
- 福地肇. 1985. 『談話の構造』東京：大修館.
- . 1988. 「機能文法の力とそのねらい」『言語』17(10)：36-44.
- Givón, T. 1993. *English Grammar: A function-based introduction*. Amsterdam: John Benjamins.
- Halliday, M. A. K. 1985. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- 林哲郎・安藤貞雄. 1988. 『英語学の歴史』東京：英潮社新社.
- 稲木昭子・沖田知子. 1991. 『アリスの英語—不思議の国のことは学—』東京：研究社.
- Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles Part III. Syntax*. London: George Allen & Unwin.
- 児玉啓介. 1970. 「フィールディングの戯曲における関係代名詞—先行詞が「人」の場合—」『鹿児島女子短期大学紀要』第5号, 77-96.
- Kuno, S. 1976. "Subject, theme, and the speaker's empathy—A reexamination of relativization phenomena," in C. Li (ed.) *Subject and Topic*, New York: Academic Press.
- . 1978. 『談話の文法』東京：大修館書店.
- Marcus, M. P. 1980. *A Theory of Syntactic Recognition for Natural Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- McCawley, J. D. 1981. "The syntax and semantics of English relative clauses." *Lingua* 53: 99-149.
- . 1988. *The Syntactic Phenomena of English*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 毛利可信. 1980. 『英語の語用論』東京：大修館書店.
- 村上晋. 1994. 「連語可能性に関する一考察—"Digging for apples"について」『佐賀大学教育学部研究論文集』42, No. 1, 73-95.
- 中尾俊夫. 1979. 『英語発達史』東京：篠崎書林.
- 中尾俊夫. 1989. 『英語の歴史』東京：講談社.
- 中尾俊夫・児馬修. 1990. 『歴史的にさぐる現代の英文法』東京：大修館書店.
- 中島文雄. 1979. 『英語発達史』東京：岩波書店.
- 大塚高信. 1976. 『シェイクスピアの文法』東京：研究社.
- Pyles, T. 1971. *The Origins and Development of the English Language*. New York: Harcourt Brace Javanovich.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 田中彰一. 1994. 「文を先行詞とする非制限的關係詞節について」『佐賀大学教育学部研究論文集』42, No. 1, 97-107.